慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	The interface between syntax and pragmatics/semantics （9月11・12日 神田外語大学）
Sub Title	統語論と語用論・意味論のインターフェイス
Author	Tancredi, Christopher
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.14, (2010. 12) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ワークショップ
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000014-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Interface between Syntax and Pragmatics/Semantics

ワークショップ　統語論と語用論・意味論のインターフェイス

（9月11·12日　神田外語大学）

2010年9月11日と12日神田外語大学において、Georgetown大学のPaul Portner氏を迎え、「統語論と語用論・意味論のインターフェイス」というワークショップが開かれました。ワークショップの狙いは統語論、語用論、そして意味論を研究している研究者の交流を図ること、また今後の理論的発展や展望も含めてこの三つの分野を専門とする研究者が活発に討議することです。ワークショップではまた、メインスピーカーのPaul Portner氏の講演のほか9名の国内から招かれた研究者が自分たちの研究発表を行いました。このワークショップはCARLSと 神田外語大学言語科学研究センター： 科学研究費助成金「談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を 目指して」により共催されました。

ワークショップでは、統語論、意味論における移動やスコープ現象を取り扱った研究や語用論における照応関係やquestion answeringに関する研究という非常に幅広い分野にわたる発表であったにもかかわらず、10名の発表者をはじめ50名以上の参加者が非常に活発に意見交換し合い、今後の理論的発展や展望も含めて活発に討議することができました。メインスピーカーのPortner氏の助動詞に関する洞察に満ちた研究成果の講演がこのワークショップのハイライトであったことはもちろんですが、国内の統語論と語用論・意味論を専門とする研究者たちの専門分野を超えての意見交換、交流が行われたことは、このワークショップの紛れもない成功と言えます。

（クリストファ・タンクレディ）

On September 11th and 12th, 2010, a workshop on the interface between syntax, semantics and pragmatics was held at Kanda Gaigo Gakuin, with Paul Portner from Georgetown University and nine other researchers from within Japan presenting.

バイオサイコシンポジウム
ブローカ野における再帰的計算

Recursive computation in Broca's area

（10月8日　東館6階G-SEC Lab）

去る10月8日東館6階G-SEC Labにて、Max Planck Institute for Human Cognitive and Brain Sciences研究員の幕内充氏を講演者に迎え、バイオサイコ研究会が開かれた。演題は「ブローカ野における再帰的計算」であった。聴衆は一般参加者も含め、様々な分野から40名ほどが集まった。

講演内容は、まず研究の背景として、言語学における「再帰」の解説から始まり、動物のコミュニケーションシステムには再帰が見出されないというHauserらの主張と、Fitch とHauserによる、サルには、再帰によって生成される音節系列の弁別が出来ないという実験データが紹介された。

さらに Friederici らが2006年に発表した ヒトを対象としたfunctional MRIを用いた機能画像研究において、サルにでも弁別可能な、より単純な音節系列の処理の際には前頭弁蓋部が、そして再帰によって生成される、より複雑な構造を持つ音節系列の処理にはブローカ野が活動するという研究結果が紹介された。

ついで、幕内氏らの研究グループの研究内容が解説された。氏らの研究グループは、ブローカ野の機能に注目し、機能画像法を中心とした画像研究を行い、自然言語において、再帰により生成される「中央埋め込み文」の処理がブローカ野で行われること、そして不可避的に随伴する記憶負荷が、ブローカ野直上に位置する下前頭溝によって対処されること、さらにこの二領域が機能的・解剖学的に緊密な連絡を持つことを明らかにした。さらに、現在進行中の研究の紹介として、言語での「再帰」と類似の情報処理をする、数学での、「逆ポーランド記法を用いた、階層構造を持つ系列の処理」の際の脳活動をfunctional MRIを用いて測定した結果が紹介された。

講演全体を通して、専門外の人間にも理解できるよう、平易で具体的な解説が行なわれ、講演後の質疑応答や、続く意見交換会にて活発な討議がなされた。（染谷芳明）

The 124th bio psycho symposium was held on October 8th at Keio University. Dr. Michiru Makuuchi, Max Planck Institute for Human Cognitive and Brain Sciences, delivered a lecture on "Recursive computation in Broca's area".